

萩傳流 V — 詩心 —

令和7年10月4日(土) ~ 10日(金)



ポエジイのない技術は空虚であるが、技術のないポエジイは無力であると言います。そこで、令和7年の萩傳流展は、地元山口を代表する詩人・中原中也の詩から茶碗に挑戦しました。今展は、萩焼作家六人による中原中也の詩のオマージュです。

岡田 泰の《白萩釉窯変灰被割高台茶盃》は中也の詩(『雪の宵』)を表現した茶盃です。「ホテルの屋根に降る雪は 過ぎしその手か、囁きか」の雪の情景を萩土と白萩釉の温かみある釉調で表し、「ふかふか煙突煙吐いて」や「ほんに別れたあのをんな、いまごろどうしてゐるのやら」という中也の切ない心を茶盃の変形したフォルムや割高台で表現しています。

坂高麗左衛門の《練込捻手茶碗》は「松の木に風が吹き、踏む砂利の音は寂しかった。暖い風が私の額を洗ひ 思ひははるかに、なつかしかつた」(『心象』)を表現した茶碗です。「あはれわれ死なんと欲す、あはれわれ生きむと欲す」という揺れ動く詩人の心を、顔料を混ぜて着色したマーブル状の土を手捻りで左右不均等な形に仕上げています。風や浪、砂利の音が聞こえて来そうです。

坂倉新兵衛の《茶盃一ほしうみー》は「黒い夜草深い野にあつて、一匹の獣が火消壺の中で 燐石(ひうちいし)を打つて、星を作つた。冬を混ぜる 風が鳴って」(『幼獣の歌』)の詩の朗読を聴きながら轆轤を挽くなかで、言語的な認識と感覚的なインスピレーションで制作した茶盃です。「幼獣の歌」が孕む情景に一番リンクする焼き上がりの茶盃を1点選びました。もう一つは《盃一骨によせてー》です。頭蓋(とうがい)や肋骨(ろっこつ)は大切な臓器を守る鎧骨(よろいぼね)ですが、久方ぶりに挑戦した肋骨をモチーフにした作品です。

新庄紹弘の《萩茶碗》は「海にみるのは、あれは人魚ではないのです。海にみるのは、あれは、浪ばかり」(『北の海』)を表現した茶碗です。赤土を使用することで北の暗い海を、土中の砂で飛沫を表わし、波は藁灰釉(白釉)を正面と見込みに垂らし表現しました。

田原崇雄の《手捏茶碗》は「冬の夜に 私の心が悲しんでゐる悲しんでゐる、わけもなく……心は錆びて、紫色をしてゐる。」(『冷たい夜』)を表現した茶碗です。藁灰釉を何層かに分けて掛けたものです。形は「私の心が悲しんでゐる」(棉(わた)の実が罅裂(はじ)ける)などの言葉から「掌(たなごころ)」をイメージして手捻りで制作しました。

玉村登陽の《萩粉引茶盃》は「幼年時 私のの上に降る雪は 真綿のやうでありました」(『生い立ちの歌』)を表現した茶盃です。人生を降る雪に譬えた中也の「真綿(まわた)のやうな」「雲(みぞれ)のやうな」「霰(あられ)のやうな」「雹(ひょう)のやうな」表情を粉引で表わし、最後の「いと貞潔でありました」という言葉から、凜として潔くすらりとした井戸茶盃となりました。

森 孝一 (美術評論家・日本陶磁協会 常任理事)

中原中也 (明治40年~昭和12年)

文学史上に大きな足跡を残した近代詩人。明治40年、山口県山口市に生まれる。30歳の若さで死去したが、生涯で350篇以上の詩を残した。その一部は結婚の翌年刊行した第1詩集『山羊の歌』および中也の死の翌年出版された第2詩集『在りし日の歌』に収録されている。その生涯を詩人として生き抜いた中也は、珠玉の詩篇を後世に残し、日本をはじめ海外にも知られ、多くの人々に愛されている。

萩傳流 V 一詩心一

会 期 令和7年10月4日(土)～10日(金)

会期中無休

開廊時間 11:00～19:00

※最終日の10月10日(金)は17:00まで

出品作家 岡田 泰 10月7日(火)～10日(金)

[在廊予定日] 坂高麗左衛門 10月7日(火)～10日(金)

坂倉新兵衛 10月7日(火)

新庄紹弘 10月4日(土)～7日(火)

田原崇雄 10月6日(月)～9日(木)

玉村登陽 10月4日(土)～7日(火)

※10月7日(火)は、茶会の席主を務めるため、ギャラリーは不在がちになります。

会 場 柿傳ギャラリー

KAKIDEN GALLERY

〒160-0022 東京都新宿区新宿3-37-11

安与ビル 地下2階

TEL 03-3352-5118 / FAX 03-5269-0335

MAIL gallery@kakiden.com



柿傳ギャラリーHP



公式Instagram



特別記念茶会「秋の消息」

柿傳ギャラリーの上にある茶室にて、特別記念茶会を開催致します。

この度は「秋の消息」をテーマとし、各作家がこれに沿った道具を制作いたしました。ご来場いただいた皆様とご縁に感謝しつつ、出品作家で力を合わせて席主を務めさせていただきます。

茶会に参加された事がない初心の方も大歓迎ですので、萩ゆかりのお道具で一服の茶の一時をお楽しみ頂ければ幸いです。

皆様からのお申し込みをお待ち申し上げております。

日 時 10月7日(火) 10:00、11:30、13:00 席入の三席

※席入15分前まで受付・寄付(7階)に集まりください。

席 主 出品作家一同

場 所 新宿 京懷石 柿傳

東京都新宿区新宿3-37-11 安与ビル

茶 席 受付・寄付「安与ホール(7階)」



薄茶席「残月亭(9階)」



点心席「古今サロン(6階)」

点 心 お食事の内容は小向付、旬菜を盛り込んだ縁高、煮物、ご飯と香の物です。

もちろん、山口県の美味しい日本酒もふんだんにご用意しております。

会 費 7,000 円(税込)

服 装 お楽な格好でご自由にご出掛け下さい。

所 要 1時間45分程度

申 込 参加ご希望の方は、右の二次元コード又は左記のお電話かメールからお申し込み下さいませ。

10/7 茶会
申込ページ





中也の詩テーマ作品 白萩釉窯変灰被割高台茶盤「雪の宵」
W13.4×D12.6×H7.3cm

「雪の宵」

ホテルの屋根に降る雪は
過ぎしその手か、囁きか

ふかふか煙突煙(けむ)吐いて、
赤い火の粉も剣(は)ね上る。

今夜み空はまつ暗で、
暗い空から降る雪は……

ほんに別れたあのをんな、
いまごろどうしてゐるのやら。

ほんにわかれたあのをんな
いまに帰つてくるのやら

徐(しづ)かに私は酒のんで
悔と悔とに身もそぞろ。

しづかにしづかに酒のんで
いとしおもひにそぞらるる……

ホテルの屋根に降る雪は
過ぎしその手か、囁きか

ふかふか煙突煙吐いて
赤い火の粉も剣ね上る。



淡青釉花器
W13.0×D12.5×H28.2cm

岡田 泰

Okada Yasushi

昭和 51 年 晴雲山岡田窯 八代 岡田 裕 (山口県指定無形文化財萩焼保持者) の長男として、
山口県萩市に生まれる

平成 14 年 東京造形大学 美術学部 彫刻科 卒業

平成 17 年 京都市工業試験場 陶磁器専修科 修了

平成 21 年 日本伝統工芸展 入選 (以後 15 回入選)

平成 27 年 日本陶芸展 優秀作品賞・毎日新聞社賞

平成 29 年 エネルギー美術賞、山口県芸術文化振興奨励賞

令和 3 年 「萩の新潮」萩・岡田窯 岡田泰 展 (奈良 緑ヶ丘美術館)

令和 5 年 伝統文化ボーラ賞 奨励賞

令和 6 年 パラミタ陶芸大賞展 大賞

令和 7 年 陶美展 特別賞 茨城交通賞

現在、日本工芸会正会員、萩陶芸家協会常任理事、日本陶芸美術協会常任幹事



中也の詩テーマ作品 練込捻手茶碗「心象」
W16.0×D14.6×H8.9cm

「心象」

I
松の木に風が吹き、
踏む砂利の音は寂しかった。
暖い風が私の顔を洗ひ
思ひははるかに、なつかしかった。
腰をおろすと、
浪の音がひときは聞えた。
星はなく
空は暗い綿だった。
とほりかかった小舟の中で
船頭がその女房に向つて何かを云つた。
——その言葉は、聞きとれなかった。
浪の音がひときはきこえた。

II
亡びたる過去のすべてに
涙湧く。
城の塙乾きたり
風の吹く
草靡(なび)く
丘を越え、野を渉(わた)り
憩ひなき
白き天使のみえ来ずや
あはれわれ死なんと欲す、
あはれわれ生きむと欲す
あはれわれ、亡びたる過去のすべてに
涙湧く。
み空の方より、
風の吹く



耳付花入
W11.4×D10.2×H22.3cm

十四世 坂 高麗左衛門

Saka Koraizaemon

昭和 63 年 母 坂 純子 (のち十三世 高麗左衛門) より山口県美東町に生まれる
平成 16 年 伯父 十二世 高麗左衛門が死去 母 坂 純子が坂家当主となる
平成 22 年 京都造形芸術大学 美術工芸学科 陶芸コース 卒業
平成 23 年 京都府立陶工高等技術専門学校 修了
平成 25 年 京都市産業技術研究所 伝統産業技術後継者育成研修 陶磁器応用コース 修了
萩に戻り、十三世 高麗左衛門の下で作陶に入る
平成 26 年 十三世死去に伴い坂高麗左衛門家を継承する
令和 元年 現在形の陶芸 萩大賞展 入選
令和 2 年 茶の湯の造形展 (島根／田部美術館) 入選
令和 4 年 十四世 高麗左衛門を襲名する
令和 6 年 萩市教育文化奨励賞



中也の詩テーマ作品 茶盃一ほうしうみー「幼獣の歌」
W14.6×D12.5×H9.5cm

「幼獣の歌」

黒い夜草深い野にあつて、
一匹の獣が火消壺の中で
燐石（ひうちいし）を打つて、星を作つた。
冬を混ぜる 風が鳴つて。

獣はもはや、なんにも見なかつた。
カスターニエツトと月光のほか
目覚ますことなき星を抱いて、
壺の中には冒険を迎へて。

(中略)

黒い夜草深い野の中で、
一匹の獣の心は燃る。
黒い夜草深い野の中で——
太古（むかし）は、独語も美しかつた！……

「骨」

ホラホラ、これが僕の骨だ、
生きてゐた時の苦勞にみちた
あのけがららしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ、
マックと出た、骨の尖（さき）。

それは光沢もない、
ただいたづらにしらじらと、
雨を吸収する、風に吹かれる、
幾分空を反映する。

(中略)

故郷の小川のへりに、
半ばは枯れた草に立つて、
見てゐるのは、——僕？
恰度（ちやうど）立札ほどの高さに、
骨はしらじらととんがつてゐる。



盃一骨によせてー
W12.0×D15.6×H12.8cm

十六代 坂倉新兵衛

Sakakura Shinbe

昭和 58 年 山口県生まれ 父は十五代坂倉新兵衛
平成 21 年 東京藝術大学 彫刻科 及び 大学院 彫刻専攻 修了
平成 23 年 京都市伝統産業技術者研修 修了
平成 29 年 ディスカバリーチャンネル「明日への扉」出演
平成 31 年 ブレイク前夜（BS フジ）出演
令和 2 年 初個展（柿傳ギャラリー）
令和 6 年 十六代 坂倉新兵衛を襲名
令和 7 年 襲名記念 十六代 坂倉新兵衛展（京都高島屋、日本橋高島屋、高崎高島屋）
令和 8 年 個展開催予定（柿傳ギャラリー／9 月）



中也の詩テーマ作品 萩茶碗「北の海」
φ11.9×H7.5cm

「北の海」

海にあるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にあるのは、
あれは、浪ばかり。

曇った北海の空の下、
浪はところどころ歯をむいて、
空を呪のろつてゐるのです。
いつはてるとも知れない呪。

海にあるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にあるのは、
あれは、浪ばかり。



窯変花入
φ13.3×H23.8cm

新庄紹弘

Shinjo Akihiro

昭和 60 年 助右衛門窯 十四代 貞嗣の長男として生まれる
平成 22 年 早稲田大学 卒業
平成 25 年 京都市産業技術研究所 伝統産業技術後継者育成研修 陶磁器コース 修了
父のもとで作陶を始める
平成 28 年 萩焼精鋭作家展（山口井筒屋）以後毎年
平成 30 年 萩・次世代の陶展（高島屋京都・東京・横浜）
令和 元年 陶壁制作（長門市役所）
令和 2 年 萩・次世代の陶 II（高島屋京都・東京・大阪・岡山・米子）
令和 6 年 個展（山口井筒屋）



中也の詩テーマ作品 手捏茶碗『冷たい夜』
φ13.2×H9.5cm

「冷たい夜」

冬の夜に
私の心が悲しんでゐる
悲しんでゐる、わけもなく……
心は錆びて、紫色をしてゐる。

丈夫な扉の向ふに、
古い日は放心してゐる。
丘の上では
棉の実が罅裂（はじ）ける。

此处では薪が煙ぶつてゐる、
その煙は、自分自らを
知つてでもゐるやうにのぼる。

誘はれるでもなく
覓（もと）めるでもなく、
私の心が焦る……



流白釉花入
φ11.5×H21.0cm

田原崇雄

Tahara Takao

昭和 57 年 山口県長門市に生まれる
平成 17 年 東京藝術大学 卒業制作展 菅原賞
平成 19 年 同大学大学院 美術研究科 彫刻専攻 修了
平成 22 年 美濃にて修行（師 豊場惺也先生）
平成 23 年 父 十三代 陶兵衛に師事 作陶に入る
平成 28 年 日本伝統工芸展 入選（以後 7 回入選）、山口県美術展 優秀賞
平成 30 年 エッフェル塔茶会【フランス・パリ】
令和 2 年 日本陶磁協会 現代陶芸奨励賞 中国・四国展「鑑賞」部門 奨励賞
令和 4 年 法基陶磁国際公募展 大賞【韓国】
現在、日本工芸会 正会員



中也の詩テーマ作品 萩粉引茶盃「生い立ちの歌」
φ15.3×H10.3cm

「生い立ちの歌」

I
幼年時
私の上に降る雪は
真綿のやうでありました
少年時
私の上に降る雪は
霰のやうでありました
十七ー十九
私の上に降る雪は
霰のやうに散りました
二十一ー二十二
私の上に降る雪は
雹であるかと思はれた
(中略)

II
私の上に降る雪は
花びらのやうに降ってきます
薪の燃える音もして
凍るみ空の跼(くろ)む頃
(中略)
私の上に降る雪は
熱い額に落ちもくる
涙のやうでありました
私の上に降る雪に
いとねんごろに感謝して、神様に
長生したいと祈りました
私の上に降る雪は
いと貞潔でありました



灰被花入
φ22.0×H22.0cm

玉村登陽

Tamamura Toyo

昭和44年 山口県萩市に生まれる
平成12年 広島大学大学院 社会科学研究科 法律学専攻 博士課程前期 修了
父、登陽に師事。作陶を始める。
平成13年 第36回 西部工芸展 入選 (以後9回入選)
平成20年 現在形の陶芸 萩大賞展 I 入選 (以後3回入選)
平成26年 第61回 日本伝統工芸展 入選 (以後3回入選)、伝統工芸士(萩市)認定
平成27年 第23回 日本陶芸展 入選 (以後2回入選)
令和元年 現在形の陶芸 萩大賞展 V 審査員特別賞
令和4年 現在形の陶芸 萩大賞展 VI 佳作
令和6年 二代 登陽 襲名
現在、日本工芸会正会員、萩陶芸家協会専務理事、萩美術協会幹事長

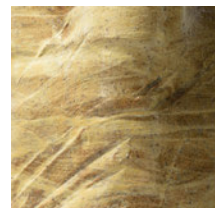
価格表

作家名	作品名		本体価格/円 (税込価格/円)	作品サイズ (cm)
岡田 泰	白萩釉窯変灰被 割高台茶盤 『雪の宵』 [桐箱付・後印]	P6	160,000 (176,000)	W134×D126×H7.3
	淡青釉花器 [桐箱付・後印]	P7	200,000 (220,000)	W130×D125×H28.2
坂高麗左衛門	練込捻手茶碗 『心象』 [桐箱付・後印]	P8	250,000 (275,000)	W160×D146×H8.9
	耳付花入 [桐箱付・後印]	P9	140,000 (154,000)	W114×D102×H22.3
坂倉新兵衛	茶盤 一ぼしうみー 『幼獣の歌』 [桐箱付・後印]	P10	300,000 (330,000)	W146×D125×H9.5
	盤 一骨によせてー [桐箱付・後印]	P11	250,000 (275,000)	W120×D156×H12.8
新庄紹弘	萩茶碗 『北の海』 [桐箱付・後印]	P12	100,000 (110,000)	φ 11.9×H7.5
	窯変花入 [桐箱付・後印]	P13	100,000 (110,000)	φ 13.3×H23.8
田原崇雄	手捏茶碗 『冷たい夜』 [桐箱付・後印]	P14	140,000 (154,000)	φ 13.2×H9.5
	流白釉花入 [桐箱付・後印]	P15	75,000 (82,500)	φ 11.5 × H21.0
玉村登陽	萩粉引茶盤 『生い立ちの歌』 [桐箱付・後印]	P16	150,000 (165,000)	φ 15.3×H10.3
	灰被花入 [桐箱付・後印]	P17	250,000 (275,000)	φ 22.0×H22.0

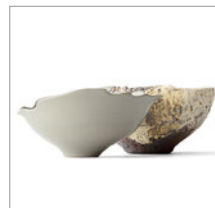
これまでの「萩傳流」



萩傳流 一若手作家六人展ー
平成 29 年 10 月 3 日(火)～9 日(月)



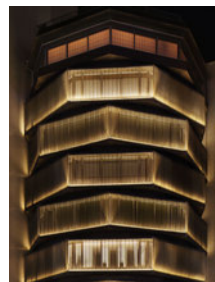
萩傳流 II ー濫觴よりー
平成 31 年 2 月 5 日(火)～11 日(月)



萩傳流 III ー付合ー
令和 3 年 4 月 12 日(月)～18 日(日)



萩傳流 IV ー歌合せー
令和 5 年 10 月 3 日(火)～9 日(月)



新宿で大人の道草を。

萩伝流ギャラリー
KAKIDEN GALLERY

弊廊のある「安与ビル」が国の登録有形文化財に登録されました。



碎雪^{カキ}ヤラリ

KAKI DEN GALLERY

160-0022

東京都新宿区新宿3-37-11